



沸騰都市ダッカより

丸紅ダッカ支店 川合 友実



繁華街のロータリー。人力車やオート力車が見える

ここダッカはバングラデシュの首都。バングラはベンガル人、デシュは国の意味。バングラデシュは周りをぐるっとインドに取り囲まれ、ダッカはそのほぼ中央に位置し、首都圏の人口は2千万人（国全体では一億六千万人）。ダッカという名前は、六世紀頃建立されたヒンドゥー教寺院ダケシワリにちなんで付けられ、この寺院は今でも旧市街に残っています。バングラ人は話好き、熱しくと止まらない。バングラデシュで長くNGOで働いていた人が、「バングラ人と一緒に働いていたら、相手の話を遮って話をする癖が付いちゃった。こんな癖が日本で出ましたらどうしよう」と心配していました。それに、バングラ人は日本好き。日本とは一九七一年の独立以来、外交・経済・文化などあらゆる面で友好関係が続け、日本人に対して非常に好意的。日本の国旗は白地に赤丸、一方バングラデシュは緑地に赤丸。好きな日本の国旗をまねたという話も。ダッカは年間を通してほとんど高温多湿、屋外で体を動かせば、汗がどと吹き出ます。数年に一度大型のサイクロンの直撃を受け、ダッカでも水浸しとなり、人や農作物などに大きな被害が出ます。そんなサイクロンの被害はあるものの、ダッカの人々は逞しくエネルギーで、国の発展の牽引役。街に出ると、人と車の洪水に圧倒されます。朝夕のラッシュ時には、カラフルな民族衣装を身にまとった繊維工場に向かう女性たち、真っ黒に日焼けした男たちがこぎ人力車、もうこれ以上入らないほど人を詰め込んだバス、これらで道がいっぱい。人



道端の果物屋。陽気なおじさんは商売上手



伝統工芸
ノクシカタ（刺繍）

も車も自分が行きたい方に勝手に動き、こちらはハラハラドキドキですが、不思議と事故は多くありません。それなりに何か運転ルールがあるようです。まだまだ貧しいイメージが残るバングラデシュですが、首都ダッカは間違いなく発展しています。きれいな車が増え、道も良くなり、鉄筋・鉄骨のビル建設も多く見られるようになりました。欧米のファストフードも入ってきて、店は若い人で溢れています。そんな経済成長・近代化に突き進んでいる姿が見られる一方、いまだ人力車を生活の一部として利用する人も多く、のんびりとした一面も残っています。宗教施設も多く落ち着いた雰囲気を出しています。国教であるイスラム教のモスクからは、お祈りの時間になるとアザーンの調べが聞こえてきます。新しいものと伝統的なものが入り混じったダッカ、今後の発展が大いに楽しみな都市です。



飛行機から写したダッカの町